

2020年12月6日・佐土原キリスト教会・アドベント第2主日礼拝

聖書箇所：イザヤ書7章1～14、8章1～8節、マタイ福音書1章23節

説教題：主に信頼せよ

今朝は「待降節第2聖日」です。お読み頂いたように「マタイ福音書」はイエスの降誕について『見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる』。(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である) (マタイ 1:23)と記します。イエス様のことが「インマヌエル」という名前で紹介されます。その「インマヌエル」という言葉が初めて聖書に登場するのが「イザヤ書」のこの箇所です。「インマヌエル」という言葉に代表されるように、聖書の中心的思想は「神は神の民と共におられる」ということです。神はヤコブに言われました。「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り…」(創世記 28:15)。「イザヤ書」には「恐れるな。わたしはあなたとともにいる…」(イザヤ 41:10)とあります。イエスは言われた。「わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」(マタイ 28:20)。「神が(私達と)あなたと共におられる」、それが聖書の一貫した教えです。しかしイザヤは「神は私達と共におられる方だ」ということを初めて「インマヌエル(『人と共におられる神』)」という固有名詞で紹介したのです。そして聖書は「それはイエスの誕生において(最終的に)実現した」と語るのです。クリスマスが「神が私達と共におられる」と語るのであれば、私達はクリスマスを前に何を心備えすれば良いのか。一言で言えば「共におられる主に信頼する」ということです。3つのことを申し上げます。

1. 救いのしるしとしての「インマヌエル」～主に信頼せよ

イザヤの預言は最終的には「イエス誕生」を指していたのですが、その700年前にイザヤがこれを語った直接的な状況があります。紀元前735年、南王国ユダに北王国イスラエルとその北にあるアラムが連合して攻めて来ました。ユダは小さな国です。そこに2つの国が攻めて来ることになり、ユダの人々は恐怖に陥り、慌てふためき、神に頼ることを忘れてしまうのです。恐れは私達を混乱させます。その時、イザヤは神の言葉を語りました。「気をつけて、静かにしていなさい。恐れてはなりません…(まず何より神により頼め…神が守って下さる)」(7:4)、「もし、あなたが信じなければ長く立つことはできない」(9)。「神に頼れ、神を信頼せよ」と語ったのです。しかし時のアハズ王は、神ではなく人に頼りました。更に北にあるアッシリヤという大国に助けを求めたのです。しかしそれは、自国の独立を犠牲にしてアッシリヤに隷属することでした。だからそのアハズに向って神は(更に)「私が共にいて守るから、そのことを信じなさい。もし信じられないのなら、今ここでしるしを求めてみなさい」(11節意訳)とまで言われたのです。アハズ王は、口先では「私は(しるし)を求めて、主を試みることをいたしません」(12意訳)と信仰的なことを言いますが「神など初めから頼りにしていない」のです。だから今度は「憐み深い神」の方から「…あなたがたに一つのしるしを与えられる」(14)と言われる。それが「見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける」(7:14)の言葉でした。「処女がみごもって…男の子を産む」。究極的には、イエス様についての預言なのですが、直接的には「この後、イザヤの妻となる女性が身籠もって男の子を産む」こと

を指していると思われます。つまり「イザヤの妻になるおとめが身籠って男の子を産む…神が共におられ、やがて北イスラエルとアラムの連合軍からユダが守られる、そのしるしとして男の子が誕生するのだ」と言われたのです。大分教会を開拓された宣教師の先生が、教会を開拓して直ぐ奥さんが妊娠されたのです。奥さんが神様に「どうしてこの時期に子どもが出来たのでしょうか」と尋ねたら、神様が「開拓伝道が祝福されるというしるしに新しい子どもが生まれます」と心に語られたそうです。そういうことです。そして実際にイザヤに男の子が生まれ、アハズの不信仰にも拘わらず、アラムとイスラエルはユダを攻め取ることにはなかったのです。いずれにしても「処女が身籠って男の子を産む」というのは、神が民に「私が共にいる」ということを知らせるために用いられた「しるし」でした。「神に信頼する時、神が助け、支えて下さる、神が戦って下さる、それが『神が共におられる』という意味である」、この出来事は人々にそう教えたのです。

私達も切羽詰ったような時、困難を抱える時、「これからどうなるのか」という恐れに身を置いてしまいがちです。そうやって(かつて)私も急性鬱になりました。しかし、その時に信仰はどうするのか。「気をつけて、静かに(していなさい)」とあります。神の前に静まるのです。そして「もしあなたがたが信じなければ、立つことはできない」(9)とされています。静まって「神は私に決して下手なことはなさない」というところに身を置くのです。もちろん、それで何もしないということではありません。出来ることがあれば、ベストを尽くすのです。しかし、それだけでは乗り越えられない困難も多いのです。だから根源的なところにおいて神に信頼を置くのです。祈って、神の業を待つのです。いずれにしても「神は生きておられる、私と共にいて、私を強め、助け、支えて下さる」、それを信じて神に頼るように、この個所は語るのです。

2. 「インマヌエル」による救い～主に信頼せよ

30年後、今度はアッシリヤがユダに攻めて来ました。この時、王はヒゼキヤに変わっていました。アハズの影響を受けていた家臣たちは、今度は南のエジプトに助けを求めようとしました。その時もイザヤは立ち上がって「そうではない。エジプトに信頼することは止めなさい、神に信頼しなさい」と言いました。ヒゼキヤも揺れました。しかし彼は、籠城に耐えられるように水路を掘らせたり、砦を築かせたり、防備も固めますが、何より信仰に立つのです。強大に見えるアッシリヤの軍隊、とても防ぐことが出来ないように見えるユダ。しかし彼は、主なる神に抛り頼むことに腹を括り、神殿に行き、泣きながら祈るのです。「主よ。どうか今、私たちを彼の手から救ってください…」(2 列王 19:19)。エルサレムの都は、アッシリヤによって二重、三重に取り囲まれました。発掘されたアッシリヤの宮廷日誌(粘土板)にも、そのことが書いてあるそうです。ところが、二重、三重に取り囲んでいた兵は、一夜の内に全滅してしまうのです。歴史の事実です。歴史家は「疫病だろう」、「食中毒だろう」と言いますが、いずれにしても、ヒゼキヤの祈りに答えて、神の介入によってエルサレムは守られるのです。

この出来事は37章に詳しく書いてあるのですが、その出来事を予め預言したのが「イザヤ書8章7～8節」です。30年前、ユダ国は神を頼らずアッシリヤを頼った。しかしその頼りにしていたアッシリヤが仇となって攻め込んで来た。しかし今回は、ヒゼキヤが静まって神の前に

出ました。「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る」(30:15)、イザヤが教えたこの御言葉を握って、泣きながら「神よ、この試練から私達を救い出して下さい。あなたが『静まれ』と言われましたから御前に来ました」と祈った。その祈りを神は聞いておられました。アッシリヤの攻撃の流れがみなぎって首にまで及んで、もはやこの神の国は全滅だという時、「インマヌエルよ、その広げた翼はあまねく、あなたの国に満ちわたる(あなたの国土を覆い尽くす)」、「『インマヌエルなる神』が、めんどりがその翼のもとに雛を抱くように、翼を広げてユダの国を覆っておられた」というのです。地上では、そんなことは見えません。見えるのは、二重、三重に囲まれた絶望的な状況です。しかし天の神の視点においては、共におられる「インマヌエルなる主」が、翼を広げて神の民を守っておられたのです。

私はカナダで出会った高齢の兄弟のことをいつも思い出します。彼は『どうしてもこの家で暮らしたい』と泣く施設の子供を養子として迎えるかどうか、この年齢で本当に育てられるのだろうか、その不安と恐れ、迷いの中で『主に信頼しよう』と決めて、施設に子供を引き取りに行き、玄関を出た時、西の空から東の空までキリストが両手を広げて立っておられるのを見た』と言われました。主が翼を広げ「私が守る」と言われたのです。私達にも時に恐れがあります。しかし、神は共におられる方です、そこにも「インマヌエルなる主の翼」があるのです。それは往々にして見えないことが多い。でも見えないからこそ、その「主の翼を信じるように」、神の御言葉をしっかり握って「主に信頼するように」、この個所も、私達に「主に信頼せよ」と語るのです。

3. イエス・キリストによる「インマヌエル」の成就～主に信頼せよ

「おとめが(処女のまま)身ごもって男の子を産む」という預言は、イザヤの時代には起こりませんでした。それはイエスの誕生によって遂に成就するのです。イザヤは遠くイエスの誕生の出来事まで見せられていたのです。「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる」(マタイ 1:23)。マタイは「マリヤの処女懐胎」を他ならぬマリヤから聞いたはずですが、そしてマタイは「イザヤの預言は、実はイエス・キリストの誕生を預言した言葉だったのだ」と分かったのです。

今から2000年前、神が人となって生まれて下さったのです。イエスは、本来、神に近づけない私達の罪を背負って十字架で死んで下さいました。私達の罪の始末をして下さり、私達と神との間に架け橋を造って下さったのです。イエスを通して「罪ある私達が本当に神と一緒にいることの出来る恵み」が最終的に実現したのです。そしてアラムやアッシリヤから神の民を守られた神は、私達の生きる現実に関わり、私達を悪の働きから守って下さるのです。それだけではない、悪は私達を永遠の滅亡に追いやろうとします。しかし共におられる神は、永遠の滅びから私達を救い出して下さるのです。「死」を思う時、誰も何も出来ないのです。そして人間の苦しみは、言うならば、全て死の滅びと結びついているのです。人は皆、死にます。でもたった1つ、イエスを信じることによって、私達は神と本当に結びつき、死の滅びから救われるのです。十字架の時、傍らの罪人はイエス様にすがりました。「イエス様…私を思い出してくだ

さい」(ルカ 23:42)。イエスは言われました。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます」(ルカ 23:43)。藤本満という先生がこんな話をしておられました。中米コスタリカのキンチという選手は、ノルウェーの競技会でクロスカントリーに出場し、途中で転んで尾骶骨を折ってしまいました。それでも何とか制限時間 5 時間以内にゴールしようとして必死になって滑った。彼は、ゴールには誰もいないだろうと思いました。ところがゴールでは、ノルウェー国王が制限時間内にやって来る選手のために、表彰式が終わっても動かなかった。国王が動かないので、観客も帰れない。6 万人がそのまま残っていました。そこに最下位のキンチ選手がやって来ました。ゴールには誰もいないだろうと思ったのに、6 万人の観衆が待ち構えていて、盛大な拍手が送られました。藤本先生は言うておられました。「私達も、転んだり、躓いたりしながら、最後尾から天国に行くような者だろう。でも天の大観衆が私達の到着を待っていてくれて、盛大に迎えてくれるのです」。神が共にいて下さるなら、私達は希望を持って死にも向かえるのです。恐れなくて良い。「神が共にいて、共に生きて下さり、やがて死を前にして滅ぶしかない私達が永遠の命にまで導き入れられる」、それが「インマヌエル」の最終的な意味であり目的なのです。『『処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる』。(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である)』(マタイ 1:23)、この言葉は「その神に信頼してイエスと共に生きて行きなさい」ということです。「神が私と共にいて下さる」ということを受け取り直し、「神に信頼して生きる」ことを再確認する、それがアドベントの大切な心備えだと思います。「神様、共におられるあなたを分らせて下さい、信頼させて下さい」そう祈りつつ、クリスマスを待ち望みましょう。